

〈新刊紹介〉

柿木重宜著

『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果たした役割について』

本書は、藤岡勝二が近代の「国語」の成立において果たした役割の全貌を明らかにすることを目的としたものである。

藤岡勝二は、京都市に生まれ、東京帝国大学文科大学博言学科に入学、国語調査委員会、高等師範学校などを経て、上田万年から東京帝国大学文科大学言語学講座を引き継ぎ、アルタイ言語学、特にモンゴル語、満州語を専門とした言語学者である。同時代の研究者との比較とともに、標準語制定、国語国字問題、言文一致、言語学的研究などの言説、理論、実践などを通して、藤岡の言語思想の本質を明らかにすることを試みた。

なお、本書の内容は博士論文（大阪大学大学院言語文化研究科、2012年度）を加筆修正したものである。

「序文」、「はじめに」、「1章 先行研究」、「2章 藤岡勝二の言語思想について」、「3章 国語調査委員会官制発足以前の状況」、「4章 国語調査委員会（1902-1913）について」、「5章 国語調査委員会の重要項目（標準語・言文一致・仮名遣い）における藤岡勝二の役割」、「6章 『言語学雑誌』の資料的価値について——藤岡勝二の言説を中心に——」、「7章 藤岡勝二とその周辺」、「8章 藤岡勝二の言語観」、「おわりに」、「引用文献」、「藤岡勝二（1872-1935）の主要業績一覧」、「事項索引」、「人名索引」。

（2013年2月1日発行 ナカニシヤ出版刊 A5判横組み 184頁 2,800円＋税 ISBN 978-4-7795-0779-3）

柳田征司著

『日本語の歴史5上 音便の千年紀』

「音便」を日本語の音韻史上もっとも重大な出来事と位置付け、日本語の歴史がどのように変化し、いまだどのような状態にあるのかを考察する書。前著『室町時代の国語』（東京堂1985）、『室町時代語を通してみた日本語音韻史』（武蔵野書院1993）に欠けていた中軸として音便を捉え直し、日本語の歴史を説明する。

「1 古代日本語と近代日本語」、「2 上代特殊仮名遣い」、「3 母音連続に生じた脱落」、「4 脱落・転成を起こさぬ母音連続——母音連続型字余り——」、「5 音便」、「6 非母音連続型字余り」、「7 長音」、「8 拗音」。

（2014年5月10日発行 武蔵野書院刊 四六判縦組み 208頁 2,000円＋税 ISBN 978-4-8386-0452-4）

櫻井豪人著

『開成所単語集 I』

——英吉利単語篇・法朗西単語篇・英仏単語篇注解・対照表・索引——』

本書は、江戸幕府の洋学研究教育機関であった開成所に関係する洋学資料のうち、「開成所によって刊行された西洋語単語集とその系統の単語集群」（著者による略称「開成所単語集」）から重要な単語集3点を選び出し、解説、影印、索引を収載したものである。3点の単語集は、『英吉利単語篇』『法朗西単語篇』（以上慶応二（1866）年刊）、およびこれらの訳語集の『英仏単語篇注解』（慶応三（1867）年刊）である。『英吉利単語篇』系統の単語集は、幕末維新期の西洋語学習で広く利用された単語集であるため、訳語の変遷を考える際に参照すべき資料であるが、これまで影印・索引化されてこなかった。それゆえ、これらの単語集を利用しやすくするため、この系統の単語集の対照表を作成した上で日本語索引・英語索引・フランス語索引を整備し、影印・解説とあわせて出版するものである。

なお、本書は平成 22-25 年度科学研究費補助金「開成所刊行辞書・単語集の基礎的研究とその翻訳語の研究」（若手研究(B)課題番号 22720176) の研究成果の一部であり、新村出記念財団平成 25 年度刊行助成金を受けて発刊された。

「はじめに」, 「凡例」, 「解説」, 「1. 『英吉利単語篇』『法朗西単語篇』以前に刊行された単語集」, 「2. 『英吉利単語篇』と『法朗西単語篇』について」, 「3. 『英仏単語篇注解』について」, 「注」, 「参考文献」, 「開成所単語集 対照表」, 「開成所単語集 日本語索引」, 「開成所単語集 英語索引」, 「開成所単語集 フランス語索引」, 「『英吉利単語篇』影印」, 「『法朗西単語篇』影印」, 「『英仏単語篇注解』影印」。

(2014 年 5 月 12 日発行 港の人刊 A5 判横組み 592 頁 17,000 円+税 ISBN 978-4-89629-275-6)

荻野綱男著

『ウェブ検索による日本語研究』

検索エンジンを駆使し、WWW の持つ膨大な情報をデータベースとして日本語学を計量的に捉える、初学者向けの教科書である。WWW の情報の性格、複合語の認識、各種の検索、ヒット数の意味などを解説し、レポートや研究での具体的な事例を紹介する。

「第 1 部 入門編」は、「第 1 章 WWW の性格と日本語研究への応用」, 「第 2 章 WWW 検索のヒット件数」, 「第 3 章 検索エンジン」, 「第 4 章 WWW 中の表現の間違い」, 「第 5 章 WWW 検索の方法論」。「第 2 部 基礎編」は、「第 1 章 複合語の認識とフレーズ検索」, 「第 2 章 AND 検索」, 「第 3 章 OR 検索」, 「第 4 章 NOT 検索（マイナス検索）」, 「第 5 章 ワイルドカード検索」, 「第 6 章 活用形の検索」, 「第 7 章

ブログ検索」,「第8章 WWWの記事の偏り」,「第9章 WWWでのヒット件数の意味」。「第3部 問題解決編」は,「第1章 「いらっしやる」の意味」,「第2章 [ei]の表記のゆれ」,「第3章 外来語の「キ」と「ク」の違い」,「第4章 外来語の「ア」と「ヤ」」,「第5章 「disられる」の意味」,「第6章 漢字語の読み方」,「第7章 WWWによる問題解決の課題例」。「第4部 研究編」は,「第1章 WWW検索による方言語形の全国分布調査」,「第2章 WWW検索と方言辞典の記載内容の確認」,「第3章 ブログに見る日本語の男女差」,「第4章 形容動詞連体形の「な／の」選択」,「第5章 外来語の語形のゆれ(1)——「チック」と「ティック」——」,「第6章 外来語の語形のゆれ(2)——「バ」と「ヴァ」——」。「第5部 応用編」は,「第1章 レポートの課題」,「第2章 「亡くなる」は動物には使わないのか」,「第3章 ニセ方言の使用状況」,「第4章 犬に「ちゃん」は付けない」,「第5章 「こんな」類と「こういう」類の位置名詞との共起」,「第6章 ゼッケンからナンバーカードへの変遷」,「第7章 レポート執筆の意味」。末尾に「文献」,「索引」。

(2014年5月20日発行 朝倉書店刊 B5判横組み 208頁 2,900円+税 ISBN 978-4-254-51044-7)

別府節子著

『和歌と仮名のかたち——中世古筆の内容と書様——』

本書は、近世前に書写された写本類(古筆)やその断片である古筆切について、新たな資料を掘り起こし、仮名の書様やそれらが異なる理由について明らかにしたものである。第一部では、平安末期から室町時代にわたる幾つかの中世の自詠自筆の和歌資料や散逸本資料を新規に発掘し、その報告と考察を述べる。第二部では、各時代によって異なる代表的な書様と、和歌の社会的役割や場に即した和歌内容、メインとなって詠歌をする人々など、基底の書様を生む背景との関係をまとめた。各章の末尾に取り上げた古筆や古筆切の部分的な影印を付す。

なお、本書の内容は博士論文(早稲田大学大学院, 2013年度)に基づくものである。

冒頭に「序章」。「第1部 和歌古筆の新出資料——中世の自詠自筆本と散佚本——」は,「第1章 新出の伝西行筆の古筆切二種」,「第2章 静真 詠五十首和歌巻」,「第3章 京都国立博物館蔵「伏見天皇宸翰御歌集」(五十五首)について」,「第4章 「実兼集切」の考察」,「第5章 西園寺実兼関連の古筆資料」,「第6章 「松木切」の考察」,「第7章 「伏見院三十首歌切」について」,「第8章 「金剛院切」に関する一考察——十四世紀の女性歌人による百首歌の懐紙の可能性——」,「第9章 「金剛院切・類切」等に関する考察——装飾料紙に和歌散らし書きの古筆切群再考——」,「第10章 「あがた切」に関する考察」,「第11章 「畠山切」について」,「第12章 「伝耕雲明魏筆 歌集切」に関する考察」,「第13章 「松梅院切・類切」に関する考察」,「第14章 「頓証寺法楽一日千首短冊」について——既存資料、新出資料による考察と集成——」,「第15章 『慈鎮和尚三百年忌、五百年忌、五百五十年忌、

六百年忌和歌短冊帖』について」。「第2部 和歌古筆の内容と書様」は、「第1章 平安時代の仮名書様の変遷について」,「第2章 伝西行筆の古筆」,「第3章 平安の仮名、鎌倉の仮名」,「第4章 続歌と短冊」。末尾に、「終章 時代を映す仮名のかたち」,「初出一覧」,「用語解説」,「掲載図版一覧」。

(2014年5月26日発行 笠間書院刊 B5判変型縦組み 648頁 12,000円+税 ISBN 978-4-305-70733-8)

藤田保幸著

『引用研究史論——文法論としての日本語引用表現研究の展開をめぐって——』

本書は、前著『国語引用構文の研究』以降の引用に関する研究を集成し、日本語の文法論的引用の研究史を論ずる書である。上代から説き起こし、70年代以降今日に至る現代の文法論的引用研究の展開を跡づけ、その意義と問題点を論究する。さまざまな研究者の引用研究を論ずることを通して、著者自身の立場・考え方を改めて明確にする試みでもある。

本書は、和泉書院研究叢書446として刊行された。

「序」,「第1章 引用研究史展望」,「第2章 近世以前の引用研究」,「第3章 引用研究の黎明」,「第4章 現代の引用研究の展開」,「第5章 藤田保幸の引用研究——自説の形成——」,「第6章 引用研究の世紀末」,「結語」,「初出一覧」,「参考文献」,「索引(事項・語句・書名)」。

(2014年5月30日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 468頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0709-5)

蜂矢真郷著

『古代語形容詞の研究』

古代語の形容詞について、語構成論的な研究を中心に述べる書。概説的な性格を持つ「総論編」と、筆者の形容詞に関する既発表論文をまとめた「各論編」とからなる。「各論編」は節としたそれぞれが一つの論からなる。

「総論篇」は、「第1章 形容詞の活用等と語構成」,「第2章 特徴のある形容詞群」。「各論篇」は、「第1章 形容詞の対義語」,「第2章 両活用形容詞の周辺」,「第3章 重複形容詞の周辺」,「第4章 形態上の特徴を持つ形容詞」,「語句索引」,「事項索引」。

(2014年5月31日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 400頁 11,000円+税 ISBN 978-4-7924-1005-6)

高山知明著

『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』

十七世紀を中心とする時期の日本語の音変化について、動的側面を明らかにする書。タ行ダ行の破擦音化、ジヂ・ズズ音の合流、濁音の前鼻子音消失化といった各変化の関係性を解きほぐし、日本語の歴史の持つ意義を再認識する。四つ仮名の書き分け指南書と

されてきた『蜺縮涼鼓集』の再評価を行う。

なお、本書の内容は、博士論文（筑波大学大学院，2012年度）に基づき、加筆修正したものである。

「第1章 序論」, 「第2章 タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質」, 「第3章 前鼻子音の変化と話者の感覚」, 「第4章 前鼻子音から読み解く蜺縮涼鼓集」, 「第5章 蜺縮涼鼓集の背景——謡曲の発音との関わり——」, 「第6章 耳障りなザ行音の「発生」」, 「第7章 二つの変化の干渉」, 「第8章 終章」, 「参考文献」, 「資料文献」, 「主要語句索引」。
(2014年5月31日発行 笠間書院刊 A5判横組み 224頁 3,300円+税 ISBN 978-4-305-70734-5)

多門靖容著

『比喩論』

前著『比喩表現論』（2006年，風間書房）刊行前後に記された比喩関連の論考をまとめた書。現代日本語，古典語の豊富な用例をもとに，隠喩の機構，日本語の比喩史，比喩の思考を明らかにする。

「1章 隠喩とはなにか」, 「2章 比喩と連体修飾——メンバ、カテゴリと存在——」, 「3章 対人関係のメタファー・シネクドキー」, 「4章 日本語の比喩史(1)」, 「5章 日本語の比喩史(2)」, 「6章 和歌喩辞受容の側面」, 「7章 神、仏、鬼の比喩——古典の用例——」, 「8章 新しい比喩表現——参照と隠語性——」, 「9章 類聚章段の思考」, 「初出一覧」。

(2014年5月31日発行 風間書房刊 A5判横組み 160頁 2,000円+税 ISBN 978-4-7599-2041-3)

金水敏・高田博行・椎名美智編

『歴史語用論の世界——文法化・待遇表現・発話行為——』

時代や文化の異なる社会で，場面に応じた言葉の使い分けや，使用法の変遷を明らかにする書。文法化と待遇表現について論じたあと，人を取り調べる，人を説得する，人に伝えるという観点から英語史・日本語史・ドイツ語史におけるトピックを掘り起こし，新たな研究へと誘う。

「第1部 文法化と待遇表現」は，「第1章 談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方（小野寺典子）」, 「第2章 初期近代英語期における仮定法の衰退と I think の文法化（福元広二）」, 「第3章 11世紀初頭の日本語における聞き手敬語「一はべり」の方略的運用——社会言語学的要因と語用論的要因をめぐって——（森山由紀子）」。「第2部 ひとを取り調べる」は，「第4章 初期近代英語期の法廷言語の特徴——「取り調べ」における「呼びかけ語」の使用と機能——（椎名美智）」, 「第5章 ドイツの魔女裁判尋問調書（1649年）に記されたことば——裁判所書記官の言語意識をめぐって——（高田博行）」, 「第6章 近世期吟味控類における「尋問」と「釈明」のストラテジーについて（諸星美智直）」。「第3部 ひ

とを説得する」は、「第7章 中世イングランド神秘主義者の散文における説得の技法（片見彰夫）」、「第8章 シェイクスピアにおける説得のコミュニケーション——法助動詞を中心に——（中安美奈子）」。「第4部 ひとに伝える」は、「第9章 ドイツ最古の週刊新聞の「書きことば性」をめぐる——出来事をどのように報道するのか——（芹澤円）」、「第10章 申し出表現の歴史の変遷——授受表現の運用史として——（森勇太）」、「第11章 『源氏物語』に現れた手紙——求愛の和歌の贈答を中心に——（高木和子）」、「執筆者紹介」。

（2014年6月6日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 250頁 3,600円+税 ISBN 978-4-89476-690-7）

定延利之編

『日本語学と通言語的研究との対話 ——テンス・アスペクト・ムード研究を通して——』

日本語学会の春季大会シンポジウム「日本語のテンス・アスペクト・ムード研究と通言語的研究」（2011年5月28日、神戸大学）を発端とした論文集。テンス・アスペクト・ムードに関して日本語学と通言語的な研究との交わりをさぐる。個別言語の世界に深く沈潜する日本語学と、グローバルに展開する言語類型論との「対話そのもの」を重視し、各章でコメントの往還がなされている。

なお、この論文集は科学研究費補助金基盤研究(A)「状況に基づく日本語話しことばの研究と、日本語教育のための基礎資料の作成」（課題番号23242023）の支援を受けている。

「第1章 記述的研究と通言語的研究との対話（定延利之・アンドレイ＝マルチュコフ）」、「第2章 歴史的研究と通言語的研究との対話（小柳智一・アンドレイ＝マルチュコフ）」、「第3章 方言研究と通言語的研究との対話（渋谷勝己・アンドレイ＝マルチュコフ）」、「第4章 対照研究と通言語的研究との対話（井上優・アンドレイ＝マルチュコフ）」、「索引」、「編著者紹介」。

（2014年6月10日発行 くろしお出版刊 新書判横組み 240頁 3,000円+税 ISBN 978-4-87424-624-5）

笹原宏之著

『漢字に託した「日本の心」』

「NHK カルチャーラジオ 歴史再発見」において2013年5月から7月に放送された「漢字と日本語の文化史」のガイドブックを基に、加筆修正を加えた書。本来、漢語を表すために作られた漢字を、日本語を書き表すための文字として変容させ変質させてきた日本人の不断の努力の歴史を明らかにし、日本人がことばのほかに漢字に求めてきたものを描き出す。

本書は、NHK 出版新書438として刊行された。

「第1章 漢字はあんがいの身近な文字である」、「第2章 日本人と漢字との出会い」、

「第3章 誤字も略字も文字のうち」, 「第4章 地名や人名を表す文字」, 「第5章 若者漢字と漢字文化の未来」, 「主要参考文献」。

(2014年6月10日発行 NHK 出版刊 新書判縦組み 272頁 820円+税 ISBN 978-4-14-088438-6)

高見健一・久野暲著

『日本語構文の意味と機能を探る』

日本語文法で従来多くの考察がなされてきたが、まだ解決に至っていない「「～である」構文」, 「存在文／所有文」, 「数量詞遊離構文」, 「壁塗り交替構文」, 「「～させてくれる／させてもらう」構文」の5つについて明らかにした書。これまでの構文研究が、限られた例に基づいて一般化を行っており、より広範なデータを検討することや、その意味や機能、文脈や我々の語用論的知識といった非統語的な要因にも配慮することの必要性を示す。

「第1章 「～である」構文」, 「第2章 「僕には妻子がいる」は存在文か、所有文か? —「いる」と「ある」の意味と構造—」, 「第3章 「数量詞遊離」再考」, 「第4章 壁塗り交替構文」, 「第5章 「～させてくれる／させてもらう」構文等の機能的分析」, 「参考文献」, 「索引」。

(2014年6月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 288頁 3,400円+税 ISBN 978-4-87424-628-3)

野田尚史・高山善行・小林隆編

『日本語の配慮表現の多様性——歴史的变化と地理的・社会的変異——』

本書は、日本語の「配慮表現」を取り上げ、可能な限り同じ枠組みで多角的に追求することを目的とした論文集である。ここでいう「配慮表現」とは、言語の構造より言語の運用に深く関わるもので、敬語のほか、前置き表現や顔文字などを含め、聞き手や読み手に対する配慮の表れに関わる表現をさす。専門分野が異なる日本語研究者の共同研究から、古代語から現代語までの歴史的变化と、現代の日本各地に見られる地理的・社会的変異という2つの観点から、日本語の配慮表現の多様性を明らかにすることをめざした。

冒頭に「この本の目的と構成」。「第1部 配慮表現の多様性の概観」は、「配慮表現の多様性をとらえる意義と方法(野田尚史)」, 「配慮表現の歴史的变化(高山善行)」, 「配慮表現の地理的・社会的変異(小林隆)」。「第2部 古代語の配慮表現」は、「奈良時代の配慮表現(小柳智一)」, 「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現(藤原浩史)」, 「平安・鎌倉時代の受諾・拒否に見られる配慮表現(森野崇)」, 「平安・鎌倉時代の感謝・謝罪に見られる配慮表現(森山由紀子)」。「第3部 近代語の配慮表現」は、「室町・江戸時代の依頼・禁止に見られる配慮表現(米田達郎)」, 「室町・江戸時代の受諾・拒否に見られる配慮表現(青木博史)」, 「室町・江戸時代の感謝・謝罪に見られる配慮表現(福田嘉一郎)」, 「明治・大正時代の配慮表現(木村義之)」。「第4部 現代語の配慮表現の

地理的・社会的変異」は、「現代語の依頼・禁止に見られる配慮表現（岸江信介）」、「現代語の受諾・拒否に見られる配慮表現（尾崎喜光）」、「現代語の感謝・謝罪に見られる配慮表現（西尾純二）」。「第5部 現代語の配慮表現の多様性」は、「談話の構成から見た現代語の配慮表現（日高水穂）」、「携帯メールにみられる配慮表現（三宅和子）」、「索引」、「著者紹介」。

(2014年6月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 326頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-622-1)

秋元実治著

『増補 文法化とイディオム化』

本書は『文法化とイディオム化』（2002年、ひつじ書房）の増補改訂版である。マクロ的言語変化理論の構築を超える、史的言語研究としての文法化に関する包括的研究である。今回の改訂では、新たに競合（rivalry）についての論文を2編加え、さらに旧版後の研究成果を補章として盛り込んだ。なお、参考文献も最新のものを加えて充実させた。

なお、本書は、ひつじ研究叢書言語編第28巻として刊行された。

「理論編」は、「第1章 文法化」、「第2章 イディオム化」。「分析例」は、「第1章 初期近代英語における複合動詞の発達」、「第2章 後期近代英語における複合動詞」、「第3章 Give イディオムの形成」、「第4章 2つのタイプの受動構文」、「第5章 再帰動詞と関連構文」、「第6章 Far from の文法化、イディオム化」、「第7章 複合前置詞」、「第8章 動詞派生前置詞」、「第9章 動詞 pray の文法化」、「第10章 'I'm afraid' の挿入詞的発達」、「第11章 'I dare say' の挿入詞的発達」、「第12章 句動詞における after と forth の衰退」、「第13章 Wanting タイプの動詞間に見られる競合」、「結論」、「補章」、「参考文献」、「索引（人名・事項）」。

(2014年6月27日(2002年11月10日初版)発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 352頁 5,000円+税 ISBN 978-4-89476-724-9)

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編

『日本古典対照分類語彙表』

本書は、宮島達夫『古典対照語い表』（1971年、笠間書院発行）の改訂増補版である。

『古典対照語い表』は、主だった古典作品の中でどの単語が何回ずつ使われているかを表にし、かつ漢語・和語を峻別したものであったが、本書はそれに加え、すべての単語に国立国語研究所編『分類語彙表』（増補改訂版、2004年）の分類番号を追記して、個々の単語がもつ性格も即座に識別できるようにした。『古典対照語い表』は徒然草・方丈記・大鏡・更級日記・紫式部日記・源氏物語・枕草子・蜻蛉日記・後撰和歌集・土左日記・古今和歌集・伊勢物語・竹取物語・万葉集の14作品を対象としていたが、これに平家物語・宇治拾遺物語・新古今和歌集の3作品を追加して17作品とし、平安作品と

徒然草とのあいだの空白を埋める。

付属 CD-ROM により本書に印刷されたすべてに加え、簡単な集計をした出現頻度配列語彙表・意味分類配列語彙表などのファイルも提供する。別冊に「古典語の統計と意味(宮島達夫)」／「Excel による『日本古典対照分類語彙表』データの活用(小木曾智信)」を所収する。

(2014年6月30日発行 笠間書院刊 B5判横組み 1152頁 9,000円+税 ISBN 978-4-305-70700-0)

日本語文法学会編
『日本語文法事典』

20世紀後半以降格段の多様化・深化を遂げた日本語文法研究の成果を集大成する事典。文法概念・用語をはじめ、個別の助詞・助動詞、文法研究の進展にエポックを画した人名・書名など、重要事項 514項目を 50音順に配列し、第一線の研究者 133名が解説した。アスペクト、格、主語、「タ」、「ハ」、モダリティなど、多角的な論議が交わされている事項については立脚点の異なる複数の研究者が執筆し、問題点を全体像の中で捉え直し複眼的な視点から今後を展望する基盤を提供する。末尾に「日英用語対照表」、「英日用語対照表」、「索引」を付す。

(2014年7月10日発行 大修館書店刊 A5判横組み 760頁 8,000円+税 ISBN 978-4-469-01286-6)

浜野祥子著

『日本語のオノマトペ——音象徴と構造——』

本書は、日本語(共通語)のオノマトペ(いわゆる擬音語、擬声語、擬態語、擬容語、擬情語全体)について、日本語の変異のひとつとして津軽方言を取り上げて比較しながら、その構造的特徴を明らかにすることを目的としたものである。オノマトペの語根の分析から音象徴的・音韻特徴を把握したうえで、意味の拡張に関して具象的なレベルでは運動の音象徴が中核を占めることを明らかにし、オノマトペと和語の近さについて検討した。さらに、日本語のオノマトペは、恣意的な記号組織としての対極にあるのではなく、非常に構造的であり、音象徴の言語化という一見矛盾するかにみえる性質を含む、一般語彙に隣接する組織であると説明する。

なお、本書の内容は博士論文(*Sound-symbolic system of Japanese*, フロリダ大学大学院, 1986年)の日本語訳に加筆修正したものである。

「まえがき」, 「第1章 オノマトペの構造的特徴の概観」, 「第2章 オノマトペの基本的な音象徴」, 「第3章 オノマトペの意味の拡張」, 「第4章 オノマトペと一般語彙」, 「第5章 オノマトペの音韻制約と音象徴」, 「第6章 オノマトペと日本語の音韻変化」, 「おわりに」, 「参考文献」, 「索引」。

(2014年7月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 176頁 2,500円+税 ISBN 978-4-87424-623-8)

国語文字史研究会編
『国語文字史の研究 14』

国語文字史研究会による論集『国語文字史の研究』の第14集である。文化を創造し、時代・地域を越えて情報を伝える言語において重要な役割を果たす文字の視点からの研究と、文字史研究に関する11編の論考に、書名・人名・用語・語彙・仮名・漢字索引を収録する。また、第一集から本書までの総目次を収める。

「片仮名書き和歌の仮名づかい——平仮名本からの書写の場合——（遠藤邦基）」、「和名類聚抄地名の音訓混用（蜂矢真郷）」、「同訓異字（今野真二）」、「『岡』の使用法から見た古代東アジア諸国の漢字文化（方国花）」、「鹿持雅澄『万葉集古義』稿本の仮名字体（内田宗一）」、「近世・近代間における口頭語の表記体選択意識の変化（矢田勉）」、「明治期のいろは仮名（岡田一祐）」、「近代における教育関係の漢字字体資料（山下真里）」、「『仮名読新聞』の外来語の表記（石井久美子）」、「〈資料紹介〉『詩文重宝記』影印と解説（佐藤貴裕）」、「〈紹介〉Sven Osterkamp Nicht-monosyllabische Phonogramme in Altjapanischen: Kritische Bestandsaufnahme, Auswertung und Systematisierung der Fälle vom Typ oŋana.（平子達也）」、「書名索引／人名索引／用語索引／語彙索引／仮名索引／漢字索引」、『国語文字史の研究』第1～14集総目次」。

（2014年7月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 280頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0711-8）

野林正路著

『いじめの構造——語彙の図式で読み解く——』

本書は、言語学（意味論）の第一人者が、語彙研究の立場からいじめに関わる語彙の構造を解くことで、いじめの構造を明らかにすることをめざしたものである。「いじめ」関連行為の名称であるイジメ、イヤガラセ、オドシ、ナカマハズレなどの語が、「いじめ」関連行為の各事例の成り立つ状況とどのように関わるかについて、多角的に分析する。

なお、本書の内容は「生活語彙の開く世界」シリーズの第一巻として発刊された。

「Ⅰ 「いじめ」の行為と志向（語彙）図式」、「Ⅱ 「いじめ」の行為の連関構成——実象の遠・近布置——」、「Ⅲ 「いじめ」行為の磁場の構成——意識連関と存在連関～間存在連関——」、「付記 「いじめ」対策の一方向——磁場の解体へ向けて——」、「エピローグ——大いなる語彙学への道——」、「〈参考資料〉言語活動のモデル図——「構成意味論」から見た——」、「注」、「関連・参考文献」、「索引」。

（2014年7月25日発行 和泉書院刊 A5判横組み 250頁 3,500円＋税 ISBN 978-4-7576-0713-2）

小林隆編

『柳田方言学の現代的意義——あいさつ表現と方言形成論——』

本書は、柳田国男の没後 50 年を記念して編まれた論文集である。柳田方言学の現代的な意義として、表現法・言語行動の中でもあいさつ表現の研究と、方言圏論を含む方言形成論という 2 つのテーマを取り上げ、今後の方言研究の新たな可能性の発掘を試みた。

冒頭に、「柳田方言学の継承と展開（小林隆）」。「第 1 部 あいさつ表現」は、「あいさつ表現の体系（町博光）」、「あいさつ表現法の実態——種子島方言の今昔：表現法の消長——（瀬戸口修）」、「感謝のあいさつ表現（田島優）」、「柳田が導く日中の出会いのあいさつ表現研究の可能性（中西太郎）」、「『田畑からの帰り道でのあいさつ』にみられる——表現発想と都市化——（灰谷謙二）」、「あいさつ表現の発想法と方言形成——入店のあいさつを例に——（小林隆）」、「方言にみる頼みかたの表現と発想（沖裕子）」。「第 2 部 方言形成論」は、「言語地理学と方言圏論，方言区画論（大西拓一郎）」、「方言圏論の発想とシミュレーションという方法（熊谷康雄）」、「音韻ルールの方言圏論（有元光彦）」、「中心地の言語的影響力——『方言文法全国地図』データベースを用いて——（鎌水兼貴）」、「近畿・四国地方における言語変化——動詞否定形式を例として——（岸江信介）」、「近畿地方の方言形成のダイナミズム——寄せては返す「波」の伝播——（日高水穂）」、「キリシタン文化と方言形成——Jesus の歴史社会地理言語学——（小川俊輔）」、「敬語意識とその説明体系の地域性（中井精一）」、「接触言語学から構想する方言形成論——ハワイの日系人日本語変種を例にして——（渋谷勝己）」、「方言形成論の到達点と課題——方言圏論を核にして——（改定版）（小林隆）」。末尾に、「あとがき」、「索引」、「執筆者紹介」。

（2014 年 7 月 31 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 416 頁 5,700 円＋税 ISBN 978-4-89476-719-5）

金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編著

『ドラマと方言の新しい関係

——『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ——』

本書は、近年、ドラマにおいて「方言」が果たす役割に注目したシンポジウムの記録である。

冒頭に、「はじめに——ドラマのなかの方言はおもしろい——（金水敏）」、「本書を読む前に知っておきたい『カーネーション』『八重の桜』『あまちゃん』のあらまし」を配し、「Part.1 ドラマ方言の新時代」では、「1. フィクションの言語と方言（金水敏）」、「2. 『あまちゃん』が開いた新しい扉——「方言コスプレドラマ」ができるまで——（田中ゆかり）」、「3. 方言とアイデンティティー——ドラマ批評の立場から——（岡室美奈子）」と、シンポジウムのパネリストによる発表内容がまとめられている。

後半は、「Part.2 公開インタビュー——方言と格闘するドラマ制作現場——」と題し、ゲスト登壇者である内藤慎介（NHK ドラマ番組部エグゼクティブ・プロデューサー／『八重の桜』制作統括）、菓子浩（NHK ドラマ番組部チーフ・プロデューサー／『あまちゃん』制作統括）、林英世（俳優／『カーネーション』岸和田ことば指導）と、金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子との間に行われた質疑応答の様子が文字化されている。末尾に、「ドラマ作品関連文献」、「参考文献」、「シンポジウム開催記録」、「おわりに（田中ゆかり）」を付す。
 （2014年8月9日発行 笠間書院刊 A5判縦組み 104頁 800円＋税 ISBN 978-4-305-70726-0）

小林隆，澤村美幸著

『ものの言いかた西東』

本書は、「ものの言いかた」は地域によって大きく異なり、必ずしもその人の単なる個性として片づけられる問題ではないことを、近年の調査から述べる。そして、そのことが地域差に基づくコミュニケーションギャップを生じさせる原因になっていると主張する。具体的な事例をもとにものの言いかたの地域差を紹介しつつ、そうした具体的なものの言いかたを操る言葉の発想法の地域差を指摘し、地域による違いの社会的背景と歴史的経緯についても述べる。

なお、本書は岩波新書新赤版 1496 として発刊された。

「序章 ものの言い方にも地域差がある」、「第1章 口に出すか出さないか」、「第2章 決まった言い方をするかしないか」、「第3章 細かく言い分けるかどうか」、「第4章 間接的に言うか直接的に言うか」、「第5章 客観的に話すか主観的に話すか」、「第6章 言葉で相手を気遣うかどうか」、「第7章 会話を作るか作らないか」、「第8章 ものの言い方の発想法」、「第9章 発想法の背景を読み解く」、「第10章 発想法はどのように生まれ、発達するか」、「終章 ものの言い方を見る目」、「引用文献」。

（2014年8月21日発行 岩波書店刊 新書判縦組み 240頁 780円＋税 ISBN 978-4-00-431496-7）